

237 1/2018.01.20

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第123回

月の桂に時雨の気配…… 桂離宮に宿る地霊を謡曲の詞章に探る

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学)

大堰川の密会

『源氏物語』松風の章には、大堰川の別荘が登場する。光源氏はそこに明石の方を呼ぶ。須磨配流の折、かの地で結ばれた明石の方とのあいだにできた娘を、それまで光源氏は目にすることがなかった。光源氏は嵯峨野の御堂に行くという口実で、密かに大堰川の別荘で明石の方に会い、そののち川上の嵯峨野で明石入道と面会している。と、紫上から和歌が届く。

月の澄む川のをちなる里なれば
桂の影はのどけかるらむ

「のどかなご滞在と拝察申し上げます」という文面だが、紫上には、夫の行動について、なんらかの予感あるいは仄かな不審が兆していたのだろう。それに源氏は次のように返す。

久方の光に近き名のみして
朝夕霧も晴れぬ山里

前半は紋切り型の口上だが、受け取った源氏の内心穏やかならぬ気配も、それとなく窺える。紫上は源氏の目的地が嵯峨野にはあらずして桂に他ならぬことを、しかと見抜いているからだ。返歌冒頭の「久方の光」云々は桂に掛かる常套句。これで源氏は桂の別荘を訪ねた事実を白状したことになる。そして返歌の後半は不可解な屈曲を覗かせる。「朝夕霧も晴

れぬ山里」。「のどけかるらん」という紫上の婉曲な、しかし当てつけ同然の言葉に対して、そう凶星を指されては、とても「のど」やかな心境とは参らない、と漏らしたことになる。およそ「天晴（あっぱれ）」とは言い難い自らの行状が露見しては、「晴れ」ようもないその心持。それを、嵯峨野の朝夕霧に託してごまかす韜晦が、和歌の修辞とない交ぜになっている。

さらに言えば、「夕霧」とは、源氏に不義を働き、女三宮と通じて薫を生むこととなる柏木の友。源氏にとっては、今は亡き葵上の忘れ形見。「朝夕霧」は、およそ無垢な自然描写ではありえない。そもそも紫上の手を経て届いた先に引いた歌は冷泉帝（当年13歳）の御製という体裁。帝は他ならぬ源氏と藤壺中宮との密通から生まれた不義の子。とすればどうだろう。物語全体の骨格をなす不義の因果応報が、それとなくこの場面の歌の贈答にも溶け込まされていたことになる。このあたり、作者、紫式部の周到な配慮が容赦なく働いている。そこには、悪智慧とすら評したい狡知が覗く。なぜならここで女性作者は、こともあろうに自らが創作した男性主人公に、先回りして密かな復讐を計っているからだ。それもなくまで、作者の企みが露見せぬよう、巧妙な「予兆」に偽装して――。山里を隠す夕霧は、光源氏の見え透いた二枚舌を読者に感づかせる一方で、作者の悪意を背後に隠し込む修辞でもあった。

藤原道長の桂殿

『源氏物語』で冷泉帝が和歌に詠った大堰川の別荘とは、藤原道長が桂川のほとりに設けた邸宅「桂殿」に想を得ている。この邸宅はその後の時代の推移のなかに失われたが、八条家を興した智仁親王は、その跡かと思われる水辺の地に、現在の桂離宮の礎となる邸宅を築造した。昭和50年代に池の改修工事がなされた際の発掘調査からは、汀の地下から、現在の庭よりも古い時代の石積みの跡が発見されている。古の廃園の上に桂離宮は営まれる。

本来ならば皇位にも就けたはずの親王が、いわば徳川家康の専横への妥協の見返りに得たのが、この洛外八条の地。

「我が世の春」を謳歌した道長、「望月の欠けたることもなしと思へば」と詠んだ平安の権力者の栄光の残骸が眠る「月の桂」の跡地に、皇位と引き換え、隠居の棟（現在の古書院）を営んだ智仁親王の心境とは、いかがなものだったのだろうか*1。

智仁（としひと）親王（1579-1629）は、豊臣秀吉の猶子（1586）として将来の関白職を約束されたものの、秀吉に鶴松が生まれた（1589）ことで、猶子も解約となった。さらに関ヶ原の戦いののち、兄の後陽成天皇から譲位の意向を受けた。弟にとってはかえって迷惑な話だった可能性も少なくはない。とはいえ帝の近習たちの躊躇に乗じた徳川家康は、智仁親王がかつて秀吉の猶子であったことを理由に、この皇位継承に難色をしめし、皇位は後陽成の実子、良仁親王の弟、政仁親王が継ぐこととなる。それが後水尾天皇（1696-1680：在位1611-29）。その生涯は熊倉功夫氏の著書に詳しいが、この帝は寛永6年の紫衣事件（1629）の際に、

声原やしげればしげれおのがまま
とても道ある世とは思はず

という激烈なる憤怒を披歴した歌を残している。高僧への紫衣着用の許に対し

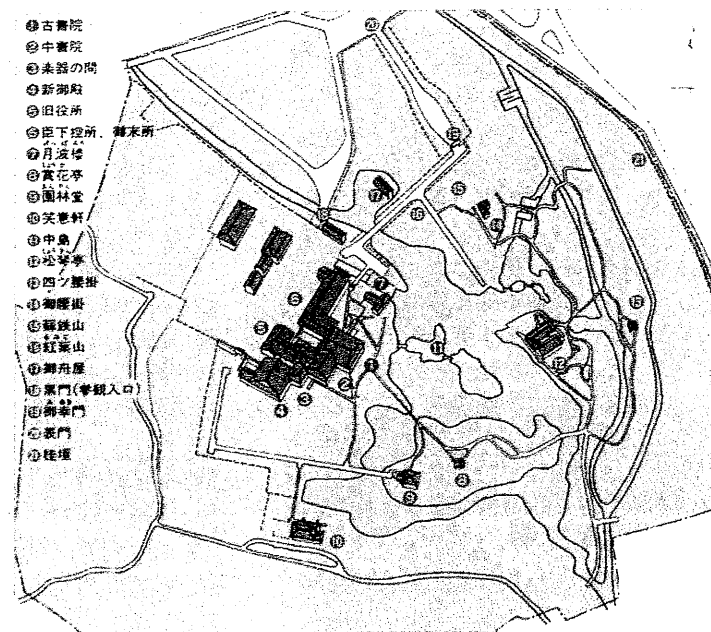
て幕府が禁中並公家諸法度を盾に、これを妨げて関係者を流罪に付した事件であり、これに激怒した後水尾帝は自らの退位を決意するに至ったといわれる。この事件と同年、天皇の従兄にあたる20歳年長の智仁親王は逝去し、桂の別荘も荒廃に任せた。それを改修し、上皇となった後水尾の桂への健勝を図ったのが、智仁の嫡、智忠（としただ）親王（1619-1662）。古書院に雁行する中書院にくわえて、御幸の客のために新御殿を建て、あわせて現在知られるような回遊式の庭園までが設えられたのは、この時期のこと。東に賞花亭（春）、南に笑意軒（夏）、西に月波楼（秋）、北に松琴亭（冬）を配し、今日まで損なわれぬ桂離宮の体裁が整えられる。だが待望の御幸が成る前年に、はや智忠親王は逝去していた。わざわざ上皇のために整備した「御幸道」を歩む後水尾の公の姿を智忠親王が目にするには、遂になかったことになる。

『古今集』には「秋来れば月の桂の実やは成（な）る 光を花と散らすばかりに」が、源忠（みなもと・の・ほどこす：932年没）の歌として採録されている。この「月の桂」は五条西洞院にあった邸宅とされ、現在の桂離宮の立地ではない。だが細川幽斎より『古今伝授』を受け、これを後水尾天皇に寛永2（1625）年に相伝していた智仁親王が、よもやこの歌を知らなかったことは、ありえまい。嫡子・智忠の「忠」にも、その事実は暗に籠められていよう。後水尾上皇の桂への御幸には、御所伝授への答礼にはとどまらぬ因果が籠められていた。

時雨亭から桂離宮へ

古今集を受け継ぐ新古今の歌人としては、藤原定家（1162-1241）の名を逸することはできまい。謡曲にも「定家」が知られる。金春禅竹（1405-1470）の作とされ、定家と式子内親王（1149-1201）との忍ぶ恋を題材としたものだが、冒頭のワキの謡には、こうある*2。

■01 桂離宮の平面図。
右上に桂川が位置する。
出典：『世界大百科事典ニッポニカ』（平凡社）



山より出ずる北時雨、山より出ずる北時雨、
行方（ゆくゑ）や定めなかるらん

桂から大堰川を川上に遡行すると、ほどなく嵐山に至る。そこに定家が結んだ庵は「時雨亭」と称する。京都盆地の西北、山間の峡谷に面したこのあたりは、秋ともなれば時雨に見舞われて煙ぶる折節も多い。時雨はここでは式子内親王の霊であり、その歌が木霊する。

秋こそあれ人は尋ねぬ松の戸を
幾重も閉じよ萬のもみじ葉

定家葛は式子内親王の墓石に執拗に「這い纏い」て、まとわりつく。その一方で嵐山の時雨が定家葛に覆われた茅屋に降りそぼり、萬の葉を紅葉させてゆく。妄執の絡まり合いが詩歌の道と綾をなす。「他生の縁は朽ちもせぬ、是ぞ一樹の陰の宿り、一河の流れを汲みてだに、心を知れと折からに、今降るも、宿は昔の時雨にて、宿は昔の時雨にて」。ここで

「一河」とは保津川から桂川へと名前を変え、やがて大堰川となる流れに託されており、『源氏物語』の「松風」の巻が示すとおり、嵐山から河を下れば、半刻ばかりで桂の別荘の周辺に至り付く。謡曲「定家」の続く序の舞には「もとよりこの身は、月の顔ばせも、曇りがちに、桂の眉墨も、おちぶるる涙の、露ときえても、つたなや萬の葉の、葛城の神姿…」とある。「桂」は美女の「眉」を三日月に譬える際の縁語とってよく、万葉集の編纂に携わった大友家持にも若い頃の作例が知られるが、桂宮家には、平安期の写本として最も古い桂宮本万葉集が伝わる。「月の桂」に由来する桂離宮はこのような、王朝の和歌の歴史という水の流れを一身に受ける立地をも踏まえ、濃密な詩的記憶の収蔵庫として佇んでいたことになる■01, 02。

さらに謡曲の「嵐山」にはこうある。「今は嵐の山桜。菜摘みの川の水清く、真如の月のす（住・澄）める世に、五濁の濁りありとても、流れは大堰川、その水上は、よも尽きじ（=月路）」。「とても道

ある世とも思えず」という「五濁」の極みの世相にあって、政治からの逃避はまた同時に「真如の月」に肖り「澄める世」に住む隠棲、アジール籠りでもあった。

金春禅竹の謡曲「定家」に戻るなら、晩秋の夕暮れの時雨は、裏に悲恋を隠しながら、「幽玄」の美学へと結晶してゆく。式子内親王には「夢かよ 闇のうつつの宇津の山 月にも辿る 蔦の細道」も知られるが、この細道を奥羽へと辿ること「冷えさび」の境地へと昇華を遂げることとなるのが、松尾芭蕉（1644-94）。禅竹の謡曲には、ほかならぬ「芭蕉」も知られるが、そこでは、夏には丈高く繁殖するが、冬には跡形もなく枯れて萎れるこの南方系の植物の霊が呼び出される。後水尾上皇と同時代を生きた、伊賀上野出身の俳人は、能楽の「定家」の紅葉する葛や「芭蕉」の葉の朽ち果てゆく姿にも無頓着ではなかった。よもやそれらの能や連歌の内に、自らに至る系統を、密かに意識していなかった、とは言われまい。

融と松風と松琴亭と

その松尾芭蕉は『奥の細道』で陸奥の塩竈を訪ねている。観阿弥（1333-1384）の謡曲「松風」は、「運ぶは遠き、陸奥（みちのく）の、その名や千賀の塩竈、賤（しず）が塩木を運びしは、阿漕が浦に引く潮、その伊勢の海の二見の浦、ふたたび世にも出ばや」と連音を重ねた自由連想に身を委ね、日本各地の歌枕や地名を呼び起こし、寿ぎつつ、源融（822-895）が河原院の屋敷の庭に海の水を引き入れた故事を語る。世阿弥（1363?-1443?）にも「融」（とおる）と題する謡曲が知られる。曲中「心も澄める水の面（おもて）に、照る月並みを数ふれば、今宵ぞ秋の最中（もなか）なる、げにや移せば塩竈の、月も都の最中かな」と見えるが、これも季節は「まだき時雨の秋なれば」とあり、「秋もはや、半ば更け行く、松の尾の嵐山」と、景物もまた松尾の社や嵐山への連想を掻き立てる。融の亡霊が舞う「あら面白の遊楽や」は「眉墨の色に三日月の、影を舟にもたとへたり」という

比喩を交えて展開する。

「河原左大臣」の融が「陸奥の千賀の塩竈を都に移された」故事に寄り添い「眉墨」の月を愛でるには、桂川から水を引き入れて王朝風の池を築いた桂の別邸の庭もまた相応しい。詩歌の世界に身と心とを委ねれば、月の都に住む貴人と共に風雅の舞を舞うこともできる。

ここで観阿弥の「松風」に戻ってみよう。「月に心は須磨の浦」とあるように、『源氏物語』の「須磨明石」の巻にも目配せし、源氏の配流の底には『伊勢物語』は在原業平の松風・村雨の故事も踏まえている。業平の目に留まったふたりの海人の乙女は、自分たちの境遇の変貌ぶりを、こう述べる。「おんつれづれの御船遊び、月に心は須磨の浦、夜潮を運ぶ海人少女（おとめ）に、おととい選はれ参らせつつ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも慣るる須磨の海人（あま）の、塩焼き衣色変へて、縁（かとり）の衣（きぬ）の空焚きなり」。

そうした須磨明石の故事をも、松琴亭の面する泉水に取り込んだ桂離宮。その古書院から張り出した竹簀子の月見台には、月夜の宴にこう吟ずるにもじっくりとくだけの趣きが宿っていよう。「浦曲（うらわ）の波の夜々は、げに音近き海人の家、里離れなる通ひ路の、月よりほかは友もなし」。そして実際、池の面だけではなく、庭のあちこちに配された蹲踞（つくばい）にも、月影が映り込む。笑意軒の「浮月」もそのひとつ。「見れば月こそ、桶にあれ、これにも月の入りたるや」。「須磨の浦に心あらん人は、わざとも侘びてこそ住むべけれ」、というその住処としても、桂の離宮は「あまりに懐かし」い*3。

竜宮城の桂の樹・月読の尊

観世信光（1435/50 - 1516）の作とされる「玉ノ井」は『古事記』や『日本書紀』にも見える海幸・山幸伝説に取材した竜宮城の奇譚、竜神物の風流能である。兄

から借りた釣針を魚に取られた火々出見の尊は、海神の翁の導きにより、竜宮の皇門に至る。そこには玉の井があり、その脇には桂の樹が生えている。青木繁（1882-1911）の《わだつみのいろこの宮》（1907）■03の描く場面もこれに重なる。ホホデミがその樹上に身を隠していた鬱蒼たる茂みは、昆布にしては妙な葉ぶりだが、根本の幹から、ほかならぬ桂樹と



■02 桂離宮（航空写真）

撮影：竹川禎一郎 提供：産経新聞社



■03 青木繁 《わだつみのいろこの宮》1907



■04 兎と桂の木《天竺国物語》
中宮寺（部分）

悟られる。「心の底も曇りなき、月の桂の光添ふ、枝を連ねてもろともに」。さらに終曲に近い天女の舞となると、こうも歌われる。「いづれも妙なる舞の袖、玉の髪さし、桂の眉墨、月も照り添ふ花の姿、雪を回（めぐ）らす袂かな」。『古事記』では穂穂手見命と記される山幸は、系譜のうえでは皇室の祖たる神武天皇の祖父にあたる。桂離宮を造営した親王たちの血統上の祖先である。

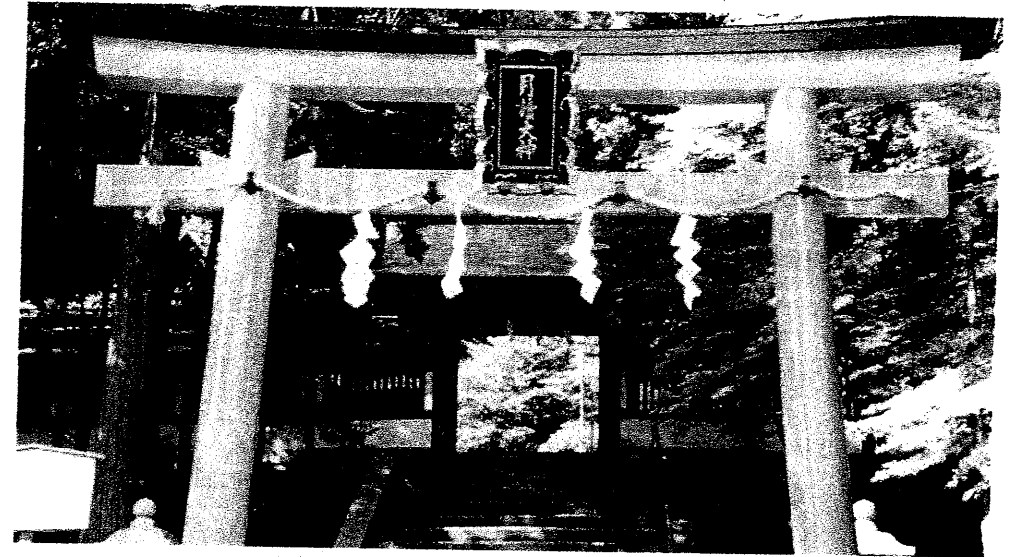
月の桂とは、元来は月桂樹であり、古代中国の神話に由来する*4。中宮寺に伝わる《天竺国物語》にも、月の兎の右側に桂樹が織り込まれている*5■04。重源による将来品と言ひ伝える《刺繍九条袈裟貼屏風》（知恩院）には月に桂の木がくつきりと浮かび上がる*6。それが日本では月読尊（つくよみのみこと）と混淆する。『山城國風土記』では、この月読尊が豊草原中国（とよあしはらのなかつくに）に降り立った際、桂の神樹に顕現したとの記述がある。桂里とよばれたその土地は、葛野月読神社■05に伝わる年代不明の『渴野坐月読大神宮伝記』では、大堰川の南西、松尾の東南と記され、それが現在に至る月読神社の縁起をなす。『文徳実録』に

見える斉衡3（856）年の記載では、大堰川の洪水を避けるため、社の場所が移されて再建された、とある。桂飴は神功皇后の半島「征伐」の故事に因み、安産祈願の妙薬として今に伝わる。

およそこうした脈絡は、現在の桂離宮の立地を支える土地の磁力、桂の地霊の証であり、このように錯綜した文学的記憶の結節点として、そこに庭園が営まれたことも、たまさか納得されることだろう。その系譜は、詩歌の特権的なトposとして、謡曲のレパートリーにも十重二十重に描き込まれ、今日までその命脈を受け継ぎつつ、輻輳した航跡を後世に伝えてきた。伝説に謳われる女流歌人*7、「出羽の郡司小野の良実が娘」と詞章に伝え、「桂の黛青うして」と讃らえた小野小町の卒塔婆もまた、山陰道すなわち丹波街道と桂川とが交差するこの交通の要所、都の南西の鬼門にあたる洛外の、ほど近くにあるものと信じられていた。

月の桂の川瀬舟、漕ぎ行く人はたれやらん、
漕ぐ行く人はたれやらん

（「卒塔婆小町」）*8



■05 現在の月読神社 京都市西京区松室山添町 撮影：2014年10月10日
出典：http://kyotomoyou.jp/tsukiyomijinja-20141010

【註】

- *1 八条宮家創設の経緯や周囲の政治状況については、熊倉功夫『寛永文化の研究』におさめられた「桂離宮 その作者と時代」（『桂離宮』岩波書店、1983年に掲載の論文、追って熊倉功夫著作集第4巻、2017年に所収）および同氏の『後水尾院』（朝日新聞社、1982年、追って中公文庫、2010年）に詳しい。
- *2 なお八条宮家の親王たちが謡曲に耽溺していたとはいえない。『当世年中行事』にも「猿楽は宮中に入らず」などの禁令が見える。とはいえ禁令が強化されたということは、事実としての猿楽の隆盛を裏付けもする。以下、八条宮家の行事とは離れて、和歌に由来する桂の地霊を、謡曲を頼りにおぼえてみる。
- *3 松琴亭の建築学的意匠、見やすいところなら例えば藍と白の対比も斬新な市松模様の障子や欄間の装飾、月見台の設えなどに寛永時代ならではの美的感覚を見て、京都洛中西南臨に位置する島原遊里に残る角屋の内装や庭に面した設えとの近似を指摘する観察は、林家辰三郎の『寛永文化』（1953年）以降、井上章一にまで受け継がれる。だが宮内庁筋にはこうした類推を忌避する「わだかまり」が存続したという。井上章一編『学問をしばるもの』（思文閣出版、2017年）に収められた「角屋と桂離宮」226-231頁参照。
- *4 欧州の月桂樹Laurus nobilis（クスノキ科の常緑樹）と同一名称だが、ここには翻訳上の混乱がある。さらに日本の桂Cercidiphyllum japonicumは落葉高木で中国の桂（木犀）とも植物分類学上では別種。
- *5 大橋一章・谷口雅一『隠された聖徳太子の世界：復元・幻の天寿国』（NHK出版、2002年）巻頭図版3、本文155頁。月の兎については、『十二支神：兎』（李御寧編・2010）の拙稿韓国語訳を参照されたい。
- *6 京都国立博物館・山川暁・主編『高僧と袈裟——ころもを伝えころもを繋ぐ』（2010年）、出品番号80。
- *7 小野小町伝説については、錦仁『浮遊する小野小町 人はなぜモノガタリを生みだすのか』（笠間書院、2001年）、同『小町伝説の誕生』（角川選書、2004年）他を参照。
- *8 なお謡曲からの引用は、原則として岩波書店・日本古典文学大系『謡曲集』上下（昭和35年、38年）の本文に沿い、煩雑にならないよう読点を適宜省き、掛詞の語釈などは必要に応じて括弧に読みを補った。

*第315回日文研フォーラムにおけるニコラ・フィエーヴェ「桂離宮の地霊（ゲニウス・ロキ）——近世の庭園における古代の神話と文化」ハートピア京都、2017年11月14日の講演のコメントーターとしてその場で行った、筆者の即興の発言をもとに文章を起こした。定説逸脱の自由連想にはご寛恕を願いたい。